

2025年度
短期留学成果報告書

専攻 (楽器等名)	留学先	期間
ミュージックリベラルアーツ(ヴァイオリン専攻)	ハダースフィールド大学	2025年9月～2026年8月
1. 実施概要(具体的に)		
大学の英国認定留学制度を利用し、約1年間、University of Huddersfieldに留学した。また、文部科学省が展開する海外留学支援制度「トビタテ！留学JAPAN」も利用した。 大学では、オーケストラや室内楽などの実技科目に加え、音楽ビジネスに関する講義を受講した。また、学生それぞれが自身の関心テーマについて研究する授業では、誰もが参加できることを理念の一つとする音楽実践であるコミュニティ・ミュージックについて分析した。 学外では、英国のプロオーケストラであるManchester Camerataが運営する「Music in Mind」という音楽プロジェクトに、毎週ボランティアとして参加した。同プロジェクトは、音楽療法の考え方を基盤とし、認知症の方を対象に音楽活動を行うものであり、大学での学術的な学びに加えて、音楽が社会の中で果たす役割について実践的に学ぶ貴重な機会となった。		
2. 留学を通じて自身が得た成果		
学内での学びでは、特に「コミュニティ・ミュージック」について研究できたことが大きな成果となった。英国はコミュニティ・ミュージックやカルチュラル・スタディーズが発展してきた国であり、日本では入手が難しい文献や資料にも比較的容易にアクセスできる環境が整っていたことが、充実した研究につながった。英語でのアカデミックな文章作成には苦労したが、最終的には当該年度の音楽学部全専攻の中で最も高い成績を収めることができた。この経験を通して、英語力だけでなく、研究への関心や主体的に学ぶ姿勢も成果につながることを実感した。 学外では、「トビタテ！留学JAPAN」を通して、異なる専門分野や目的を持って活動する日本人学生と出会うことで、自分にはなかった視点や価値観に触れ、多くの刺激を受けた。 また、そのコミュニティを通じてドイツやスウェーデンの日欧交流イベントに運営側として参加し、演奏する機会も得た。現在も、そこで出会った大学院生2名とアートプロジェクトを企画している。 そのほか、Menuhin Festival Gstaad Youth Orchestraへの参加や、University of the Arts London、Guildhall School of Music & Dramaの短期集中講座の受講など、幅広い活動にも取り組んだ。 留学期間が約1年間と限られていたこともあり、留学中にしか得られない経験をできる限り吸収したいという意識を持ち、学内外を問わず積極的にさまざまな活動に参加することができた。		
3. 反省点		
留学生生活を振り返ると、英語の語彙力やリスニング能力をさらに高めた状態で留学を開始できていれば、現地での人間関係をより深めることができたと感じている。 もちろん友人関係を築くためには、英語力だけでなく、自分から積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢が重要である。実際、英語に自信がない状況でも、自分から話しかけたりすることで、友人を作ることはできた。 一方で、言語面での制約があることで、「留学生」という枠を超えてより対等で自然な友人関係を築くことには、難しさを感じる場面もあった。特に、現地の学生同士のグループで会話が進む際には、会話の速度や使用される語彙、文化的な背景への理解が追いつかず、十分に会話へ参加できないことがあった。留学前に英語力を磨ききれなかったことが反省点である。		
4. 今後の参加者に伝えたいこと(持ち物、事前学習等)		
事前学習としては、可能な限り英語力を高めた状態で留学を開始することを勧めたい。現時点では、IELTS Overall 6.0程度を留学条件に定めている大学が多い印象があるが、実際の留学生活では、個人的にはOverall 7.0程度の英語力があると、授業や日常生活における言語面での負担が軽減され過ごしやすくなると感じた。 持ち物については、普段から使用している薬がある場合は、日本から持参することを勧めたい。私は留学中に現地で薬を購入することもあったが、日本で普段使用している薬とは効き方が異なり、副作用を強く感じることもあった。 また、英国やヨーロッパの多くの地域ではキャッシュレス決済が普及しており、日常生活で現金を使用する機会は比較的少なかった。ただ、タクシーなどでは現金での支払いが必要となる場合もあったため、遠出をする際には、万が一に備えてある程度の現金を持っておくことを勧めたい。		